

# 委託事業実施内容報告書

## 平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

### 【日本語指導者養成】

受託団体名 越前市国際交流協会

#### 1 事業の趣旨・目的

外国人住民の占める割合が市内で最も高い地区の公民館と連携し、ほとんどの事業を同地区にて実施した。日本語指導ボランティア養成講座では、日本語教授法に限らず外国人ゲスト講師による様々なクラスを加えた。また、異文化理解ワークショップや多文化共生に関する勉強会については、同地区民にも広く参加を呼び掛けた。養成講座生のみならず、会場地区に住む人々の多文化共生の心を育み、外国人住民への日本語支援が地域の取り組みとして定着するための足掛かりとなることを主な目的とした。

##### ●具体的な目的:

##### 1. 新たなネットワークの構築:

会場地区(公民館)をはじめ、地元教育機関(大学)や市民活動グループ及び行政など複数の団体が連携し、新しいネットワークが構築される。

##### 2. 外国人住民をパートナーとして地域に迎え入れる土壌づくり:

会場地区に潜在する新たな日本語支援の担い手が、日本語指導法を学び多文化共生についての理解を深めることで、地域の外国人支援に対する関心度が高まる。

##### 3. 地域住民の多文化共生マインドを育む:

養成講座生以外の人も異文化理解ワークショップや多文化共生を考える勉強会に参加することで、より多くの地域住民が多文化共生の認識を深めることができる。

##### 4. 地区生涯学習・日本語を学ぶ講座の誕生:

業務終了後、地区の生涯学習として日本語指導法を学び合うような自主講座が誕生し、同地区において、日本語教室設置の気運が高まることを期待する。

#### 2 企画委員会の開催について

##### 【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月24日	武生南 公民館 2F講堂	加藤 優子 道正 志津子 平野 祐子 村田 千津子	【確認事項】 1 事業計画内容 【協議事項】 1 異文化理解講座内	目的・事業内容の確認  養成講座以外の講座を公民館

		朽原 元子 畠中 正子 斯波 美津子 佐藤 かよ子 中村 嘉夫 西野 孝信 山口 和弘 林 秋絵 中須賀 美幸 下村 千尋* *オブザーバー参加 以上 14 名	容・開催時期  2 日本語指導ボランティア養成講座内容(案)  3 同講座の受講料等(案)	行事とタイアップする案が出たが、受講者のターゲットを明確に絞り内容と開催時期を再協議する。  現在活動しているボランティアからの報告なども追加する。  受講料・修了証授与の基準等を定めた。
9月9日	武生南 公民館 2F講堂	加藤 優子 道正 志津子 平野 祐子 東 真美子 村田 千津子 朽原 元子 斯波 美津子 佐藤 かよ子 西野 孝信 山口 和弘 藤間 真由美 林 秋絵 中須賀 美幸 以上 13 名	<b>【報告事項】</b> 1 日本語指導ボランティア養成講座の経過  2 第1回異文化理解ワークショップ(8月7日)  <b>【協議事項】</b> 1 第2回異文化理解講座(案)  2 第3回異文化理解講座(案)  3 日本語指導ボランティア養成講座修了後の活動予定について	受講者数とカリキュラムについて確認。  報告と振り返り。  内容確定。日程と会場は事務局で調整。  公民館事業と共催。事業テーマをすりあわせ、内容を検討。  受講生対象にアンケート調査を実施し、受講生の要望と外国人生徒のニーズに合った教室やボランティアのコーディネートに活かす。
10月28日	武生南 公民館 2F講堂	加藤 優子 道正 志津子 村田 千津子 佐藤 かよ子 西野 孝信	<b>【報告事項】</b> 1 養成講座生アンケート結果	ほとんどの講座生が、実際の活動までにもっと十分な準備期間が必要と感じていた。

		山口 和弘 藤間 真由美 林 秋絵 中須賀 美幸 以上 9 名	2 第2回異文化理解ワークショップ <sup>o</sup> (10月21日)  【協議事項】 1 第3回異文化理解講座案  2 日本語指導ボランティア養成講座修了後の活動予定、他  3 開催地区における報告会(案)	報告と振り返り。  公民館事業と連携、多文化共生を考える講座を開く。テーマや日程は公民館と再協議。  講座修了後も継続している勉強会を、公民館の自主講座にするかを参加者と協議する。  開催方法については、公民館側と協議の上決定する。
12月16日	武生南 公民館 2F講堂	加藤 優子 道正 志津子 東 真美子 斯波 美津子 朽原 元子 西野 孝信 山口 和弘 藤間 真由美 林 秋絵 中須賀 美幸 以上 10 名	【報告事項】 1 業務計画変更承認申請書の提出  2 第3回講座「多文化共生を考える」(11月26日開催)  3 日本語指導ボランティア養成講座修了生勉強会について  【協議事項】 1 開催地区への報告について	計画変更箇所の説明  報告と振り返り  勉強会の現状報告。自主講座化について、メンバーの意向を聞く。  市広報に折り込み、報告レターを全戸配布。運営委員への決算報告は文書の送付をもってかえる。

### 3 講座の内容について

#### ①日本語指導ボランティア養成講座（全10回コース）

- (1) 養成講座名「外国出身のご近所さんのための日本語指導ボランティア養成講座」
- (2) 養成講座の目標

日本語指導法の他、多文化共生の意識を深めてもらうための内容を多く取り入れ、在住外国人と対等な目線でボランティアに携わることの重要性を学ぶ。

(3) 受講者の総数 19人

(出身・国籍別内訳 日本18人, 中国1人)

(4) 開催時間数(回数) 20時間 (全10回)

(5) 参加対象者の要件 特になし

(6) 受講者の募集方法

チラシ郵送(会員、関係団体)、ホームページ情報掲載、地元新聞への情報掲載(有料)、市広報掲載、開催地区全戸配布。

(7) 研修会場 武生南公民館(越前市武生柳町)

(8) 使用した教材・リソース

- ・文化庁「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案
- ・ゼロからスタートにほんご会話
- ・こんにちは、にほんご
- ・日本語学級
- ・にほんをまなぼう
- ・みんなの日本語
- ・NIHONGO FUN & EASY
- ・高校入試社会問題集
- ・教科書
- ・エリンが挑戦 にほんごできます

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
①8月11日 19:00～21:00	国語と日本語「日本語を外から見てみよう」「国語と日本語はどのように違うのか」を考える。	しくら日本語の会代表 村田千津子	21人
②8月18日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎① 日本語文法 基礎1	しくら日本語の会 下村千尋	18人
③8月25日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎② やさしい日本語とは:災害時に必要なやさしい日本語の作り方を考える。	しくら日本語の会代表 村田千津子	18人

④9月1日 19:00～21:00	日本語文法：直接法とは 「あなたも外国人」：外国 語で外国語を学ぶ体験	しくら日本語の会代表 村田千津子(他、補助講師 外国人留学生1名)	17人
⑤9月8日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎③ 日本語文法 基礎2	しくら日本語の会 下村千尋	19人
⑥9月15日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎④ 日本語文法 基礎3	しくら日本語の会 下村千尋	14人
⑦9月22日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎⑤ 生活日本語	しくら日本語の会代表 村田千津子 (他、下記補助講師2名) しくら日本語の会 朽原元子 越前市国際交流協会: 日本語教室代表 佐藤かよ子	16人
⑧9月29日 19:00～21:00	外国籍市民の現状「外国籍 市民の声を聞こう」私たち に何ができるのか?	しくら日本語の会代表 村田千津子(他、補助講師 外国人留学生3名)	15人
⑨10月6日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎⑥ 子どもへの教え方 巡回指導員から話を聞き、 外国籍の子どものために できることを考える。	しくら日本語の会 朽原元子 (他、下記補助講師1名) しくら日本語の会代表 村田千津子	16人
⑩10月13日 19:00～21:00	日本語の教え方の基礎⑦ 子どもへの教え方 修了式	しくら日本語の会代表 村田千津子	15人

【写真】



(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

「日本語指導ボランティア活動に関するアンケート調査」(9月22日実施)

主な設問は次の通り;

- Q1. 日本語指導経験の有無: はい・・・約1割 ・ いいえ・・・約9割
- Q2. これまで/今後日本語指導する上で不足していると感じていること:  
(多い順に)日本語指導の経験・日本語指導のノウハウや技術・外国の習慣や知識・日本に関する知識等
- Q3. 日本語ボランティアとして活動する上で最も期待すること:  
(多い順に)外国人とのコミュニケーションを通し、視野が広がる・外国人と互いに良き隣人となれる・異文化を背景に持つ人を理解できる・日本文化や生活習慣を外国人に分ってもらえる、等
- Q4. 教えられることが出来そうと感じる日本語について:  
(多い順に)簡単な挨拶など初心者向け・ひらがなやカタカナなどの読書き・越前市民が話す生活日本語
- Q5. 希望する活動スタイル:  
(多い順に)既存のグループに属する・協会にボランティア登録し受講者を紹介してもらい・学び合いができるような講座を通して教える、等
- Q6. 活動可能な日時:  
活動できるかどうか分らない・・・約7割 ・ 平日・・・約3割

\* 今回の受講生の傾向として、日本語指導の経験を積み日本語教育全般の知識や技術を身に付けたいという希望とは裏腹に、活動の意思は非常に消極的であった。

## ② 実施主体からの研修内容結果評価

日本語教授法以外の様々な研修内容を加えた。外国語で外国語を学ぶクラスでは、ゼロから日本語を日本語で学ぶ外国人生徒の気持ちを体感した。また、ブラジル・中国出身の外国人生活相談員や学校支援員から日本で暮らす外国人の気持ちや現状に関する話を聞いたり、活動中の日本語ボランティアの体験談や、指導に役立つウェブサイトやインターネット活用法の紹介等もおこなった。

ボランティアが日本語を教える上で、教授法を身につけることだけが第一歩ではない。日本語教室にやって来る外国人住民にとっては、生活相談や日本人とつながることが二次的な目的になる場合があるからだ。教授法以外の授業を通して、「先生」ではなく、「隣人」という立場で接することも、日本語ボランティアに求められることだということを知って頂けたことと思う。

## ③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

養成講座修了後の現在も、会場地区在住の日本語教師先導のもと、一部の修了生が同地区公民館で勉強会を継続している。近隣に住む中国人研修生も数名加わり、時には中国語を教えてもらうなど楽しく互恵的な交流が生まれている。今後は残

りの修了生や地元住民にも参加を募り、外国人住民が気軽に訪れて日本語と外国語を学び合うことができる「日本人住民と外国人住民がつながる地域の場」として定着することが期待される。公民館と協働し、持続可能でより活発な活動へと発展していくためのフォローをしていく。

## ②異文化理解講座（全2回）

(1) 講座名「異文化理解ワークショップ：バーンガ体験」

(2) 講座の目的

言語・文化・習慣などの違いをシミュレーションするワークショップを通して、異文化に直面した際その相違を乗り越える方法を発見する。また、異なる文化背景の人とのコミュニケーションと異文化理解の難しさを再認識する。

(3) 受講者の総数

① 29人（出身・国籍別内訳 日本 25人、中国 4人）

② 25人（出身・国籍別内訳 日本 13人、中国 7人、ブラジル 4人、タイ 1人）

(4) 講義時間数（回数） ① 1時間 ② 2時間（全2回）

(5) 参加対象者の要件 特になし

(6) 受講者の募集方法

公民館側による地区民への呼び掛け、協会ホームページ掲載、会員や関係団体へのチラシ郵送・設置、地元新聞への掲載掲載（有料）

(7) 研修会場 ①武生南公民館（越前市武生柳町）

②仁愛大学駅前サテライト会場（越前市府中）

(8) 使用した教材・リソース

・図書「Barnga: A simulation Game on Cultural Clashes」

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
①8月7日	外国出身の子どもが触れるカルチャーショックの事例紹介 沈黙のトランプ「バーンガ」の体験 ／異文化衝突模擬体験	しくら日本語の会 朽原元子	29人
②10月21日	異文化理解ワークショップ「バーンガ」／異文化衝突模擬体験と振り返り。異文化を背景に持つ人とのコミュニケーションと異文化理解の難しさについて考える。	仁愛大学人間学部 コミュニケーション学科講師 加藤優子	25人

【写真】(8月7日開催の様子) (10月21日開催の様子)



## (10) 講座の評価

### ① 実施主体からの研修内容結果評価

(一回目:8月7日)

外国から来た子どもが触れる身近なカルチャーショックの事例として、テスト採点方法の違い(日本・ブラジル・イラン・中国・タイの5カ国)を紹介した後、各グループを国に置き換えてゲームをすることで、「異なる文化に属する」という感覚を具体的に得られたのではないかと思う。

一方で、保護者同伴であっても小学生低学年の参加者にとって、ゲームのルールを理解することや沈黙を守ることは難しかったようだ。また、与えられた時間が短かったので、ルールをもっと単純化する必要があった。振り返りが最も大切なアクティビティなので、参加対象者については、ゲームのねらいについてきちんと理解し納得できる位の年齢に達した人とするのが望ましかった。

(二回目:10月21日)

日本人同士の場合、ゲームは穏やかに進むがその分収穫も少ない。複数の文化が拮抗すると対立も起こることがあるが、そこから得られることも大きい。そのことを考慮し、チラシを多言語化するなどして可能な限り外国人市民の参加を募った。座学研修中の中国人実習生や日本語教室の生徒などに声を掛けた結果、参加者の約半数が外国出身者となった。

参加者の異文化適応度が高かったためか、特に雰囲気が悪化することなく終了した。振り返りの際、異文化に接触したときの各人の反応について、「気付き」はできたようだった。「どうやって相手との相違を乗り越えるか」については、各人が知恵を絞って対応していたが、取った方法についてもっと分かち合えるとよかった。

## ②多文化共生を考える講座(全1回)

(1) 講座名「多文化共生を考える講座:ご近所さんは外国人~地域の国際化は今!~」

(2) 講座の目標

外国人住民の比率が高い地区において、同地区民が多文化共生について考える機会を提供する。外国人住民ゲストから「地域での関わり方」・「日本での生活で感じた文化や習慣・男女の役割・コミュニケーション法などの違い」等の話を聞く一方

で、日本人の地域住民側から外国人住民に対して抱く思いなどを共有し相互理解につなげる。今後も在住外国人が増えることが予想される中、外国人を過剰に特別視することなく異文化を持つ住民とより平和的に共生していくためには、双方にどういった心掛けが必要なのかについてヒントを得る。

(3) 受講者の総数 29人

(出身・国籍別内訳 日本 20人、ブラジル7人、中国 2人)

(4) 講義時間数(回数) 1.5時間(全1回)

(5) 参加対象者の要件 特になし

(6) 受講者の募集方法

公民館側による地区民への呼び掛け、協会ホームページ掲載、会員・関係団体へのチラシ郵送・設置、地元新聞への情報掲載(有料)

(7) 研修会場 武生南公民館(越前市武生柳町)

(8) 使用した教材・リソース 特になし

(9) 講座内容

日時	講座名/学習内容	講師	受講者数
11月26日	テーマ：多文化共生を考える 「ご近所さんは外国人～地域の国際化は今!～」在住外国人と共に多文化共生について考える。	NPOえちぜん 事務局次長 山口和弘	29人



(10) 講座の評価

① 実施主体からの研修内容結果評価

会場地区の公民館では以前から外国人住民との交流事業がなされており、多文化共生の土台ができていると考えられる。今回の参加者も、半数以上が同地区民だったことから、外国人住民をコミュニティの一員として意識している住民の割合は比較的高いと思われる。

話合いの中で、日本人側は外国人からの声掛けを待っているようだったが、外国人側も日本人からの声掛けを待っている人がいることが分かった。日本語が不得手な住民に対しては、分かりやすい日本語で明確な目的を表示し地域参画を求めていくことが、多文化共生のさらなる促進に結び付くのではないだろうか。講師は、「ゲストとしてもてなす国際交流や一方通行の外国人支援ではなく、対等な関係が築く、と

ということが肝心。男女共同参画や多文化共生は、特定の人を優遇するものではなく、すべての人が暮らしやすい地域にする手段の一つ。」と締めくくった。

公民館講座「あなたが主演」事業としても開催したことで、連携意識をより深めることができたと思う。今後も公民館側と地域の国際化情報を共有することで、つながりを維持していきたい。(12月15日発行の同地区広報誌「南の風ニコ・サン」に、同事業の報告記事を掲載して頂いた。)

#### (11) 全3事業の成果

##### ① 他事業との連携

開催地区の公民館に事業共催を依頼し、会場提供や広報等の全面的な協力を得ることができた。多文化共生を考える講座については、公民館事業も兼ねて実施した。また、養成講座修了後も継続中の勉強会については、同公民館の新たな自主学习講座への発展も期待される。

今回の事業内容と成果について、市広報のNPO活動紹介コーナーに掲載した他、当会が作成した報告レターを地元広報誌と共に開催地区で全戸配布して頂くなど、地元自治振興会にも多大なる協力をして頂いた。

##### ② 研修後の人材活用

協会側から積極的に活動の場を紹介・提供していく。(既存の日本語教室で補助教師として経験を積んでもらう、公民館で継続中の日本語勉強会への参加を促す、など)また、継続中の勉強会が地域の自主講座として定着すれば、同地区住民の参加も期待され、新たな日本語ボランティアの担い手が地元で増えることにつながる。地域に根差した支援体制が整っていけるよう、今後も公民館と連携した研修や勉強会を予定している。

#### (12) 今後の課題

運営委員会や各種講座の開催を通して、公民館・地元大学・行政・市民活動グループ(NPO)が連携したことで、多文化共生社会促進の輪が広がったことが何よりの成果だった。人と人とのつながりが必要不可欠な活動だが、協力者は常に不足しているのが現状である。今後も日本語ボランティアを増やす試みを続けていく他、分野を問わず地域で活躍する市民グループとも連携を試み、幅広い切り口から多文化共生マインドを拡げていく必要がある。